

地域が変わる—— 地域活性化の現場

彦根

◎チャレンジショップひこね ▶ <http://www.hikone-cci.or.jp/shougyou/shougyou1/>

店を開きたい。本気な人材を呼び込む支援 空き店舗活用で商店街の賑わいを取り戻す



陶磁器・雑貨販売の「The Good Luck Store」(2012年3月オープン)で説明を受ける見学ツアーの参加者

シャッターが目立つ商店街、少子高齢化に伴い、空き家の増える住宅地。日本の多くの地方都市で中心市街地の空洞化が問題になりつつある。彦根城の城下町として栄えた歴史あるまち並みを残す彦根市では、空き店舗への新規出店を促す「チャレンジショップ」が、商店街の活性化に効果を上げている。

店をやりたい本気を 家賃補助などで応援

“商店街に店を持つ。本気な人求む。”と大きく書かれた真っ赤な表紙のリーフレットが、彦根商工会議所や彦根市内の金融機関に置かれている。これは、彦根商工会議所が彦根市の補助金を活用し、中心市街地活性化に取り組むTMO^{*}として行う事業「チャレンジショップひこね」の案内だ。

チャレンジショップひこねの目的は、彦

根市の中心市街地にある11の商店街を活性化すること。店を開きたい個人・グループ・企業に対し、商工会議所が商店街にある空き店舗を紹介。月額5万円(ただし、家賃の80%まで)を上限に、家賃を半年間補助し、経営指導や広報などのサポートも行う。2002年からスタートし、今までに約50店舗を支援、現在は28店舗が営業中だ。

「最初の頃は、趣味の延長で試しに半年間やってみようという方もいたが、最近では将来を見据えて資金もしっかり準備

するなど、まさに『本気な人』が増え、事業を継続する割合もぐんと高まった。時代のニーズに合った新しい店が入ることで、商店街の新陳代謝を促す効果も生み出している」と応募者をサポートする彦根商工会議所の経営指導員、追間勇人^{はさま はやと}さんは話す。

彦根城の観光客約70万人を いかに商店街に導くか

古くから交通、戦略上の要衝として栄えた彦根市は、江戸時代に城下町と

して発展。1937年の市制施行後も、JR彦根駅から彦根城を含む中心市街地は、70年頃まで県内で最も賑わう商業地域の一つだった。

しかし、郊外の大型商業施設が増加する一方、旧来の商店街では老朽化や後継者不足などの問題が浮上、空き店舗も増えた。また、若年人口の流出と高齢化が進み、中心市街地の空洞化は顕著になった。

このような中、彦根城のすぐそばに、江戸時代の町並みを再現した「夢京橋キャスルロード」が整備され、まちなかに人が流れるきっかけができた。そして、かつての賑わいを取り戻そうと99年、市と商工会議所などが連携し「彦根市中心市街地活性化基本計画」を策定。2007年には「国宝・彦根城築城400年祭」が開催された。ご当地キャラ「ひこにゃん」が全国的な人気者になったこともあり、彦根城の年間観光客数は70万人以上に上り、市全体では200万人を超えるまでになった。しかし、多くの観光客が彦根城とキャスルロードを巡るだけで、各商店街まで足を伸ばす人は多くない。チャレンジショップひこねは、こうした背景から生まれた取り組みだ。

チャレンジ店が刺激に 商店街に変化を起こす

これまでに出店したチャレンジショップは、カフェやカレー店、居酒屋などの飲食店の他、雑貨店や陶器店、鞆屋、



居酒屋「一平ちゃん」(12年4月オープン)



11年4月にオープンしたハンドメイドオリジナル鞆屋「100children」

古書店、自転車屋などの小売店、猫カフェや耳つばダイエツなどのサービス業など、多岐にわたる。開始当初は11商店街全体で約25%もあった空き店舗率が、現在では約18%に改善した。応募者も年々増加し、この事業が商店街をさらに変化させそうだ。

「新しい店舗ができることで、以前からあった店が刺激を受けて、店舗の改装を行うなどの例もあった。保育サービスを始めたチャレンジショップの場合は、そこに子供を預けたお母さんが商店街で買い物をするという波及効果も出ている。街を元気にする意欲を持った人に集まってもらう方策を用意することが私たちにできること。いろいろな人が集まることで、空き店舗の活用法は無限に広がる」と商工会議所の安達昇中小企業相談所長。

定住者増と商業活性化は まちづくりの両輪

チャレンジショップひこねの他に、彦



炉端焼き「魚丸」(14年6月オープン)



「彦根バリエータ食堂」(12年1月オープン)

根商工会議所では中心市街地活性化策として、「小江戸ひこね町屋情報バンク」にも関わっている。近年増加している町屋や古民家の空き家を、住宅や店舗として活用したい希望者に紹介している。大規模な空襲を受けることなかった彦根市には、明治以前から続く町屋や古民家が多数残されている。町屋情報バンクは小江戸と称される風情ある町並みを維持したまま、活気あるまちづくりを進める取り組みだ。

「彦根の中心市街地には江戸時代、約3万人が住んでいた。それが、今では1万人を切った。商店街の支援策をどれだけ講じて、周りに生活者が住んでいなければ、本来の賑わいを取り戻せない。商業の活性化を図るチャレンジショップとまち並みの保存や住宅の利用を促進する町屋情報バンクは、まちづくりの両輪。観光資源、商店、住宅を総合的に考えたコンパクトなまちづくりに向けて、民間と行政が一体となって、トータルにコーディネートする動きを本格化させていきたい。『彦根は日本の10万人都市を目指そう』と、私は商工会議所をよく言っている。チャレンジショップや町屋情報バンクの活動を通じ、さまざまな新しい人材がこの街で暮らし、働くようになってきた。人は人を呼ぶ。魅力ある人がいる街には、魅力ある人がやってくる。彦根をこれからもっと活力ある街にしていきたい」と、中川哲副会頭は期待を込める。

^{*}TMO=タウンマネジメント機関/地域の中心市街地を盛んにするため、商工会議所・商店街組合・企業・市民・行政機関が協力して展開する事業を総合的に調整する組織